



千秋公園内の胸像

さえと同乗、女流同士で郷土の空を飛び大評判になったものだ。

秋田にも飛行学校があった。昭和二年に新屋に開校した秋田飛行学校で、相沢という飛行家が校長だった。

同校の飛行機が、開校した年の七月二十四日、灼けるような炎天下での練習中翼を松の枝に触れ墜落した。この時九つになる坊やがプロペラに打たれて死亡、もう一人の女児が重傷を負うという惨事を起した。秋田としては初の悲惨事で、このため学校も閉鎖されてしまった。

### 惨死！二十八の一期

一閑話休題。初の郷土訪問飛行の第二日、秋田での飛行には、当時の新聞記者として筆者も臨場していた。六郷から四十五分秋田へ着いたが、雲間から複葉の愛機が姿を現わすと次第に機影が目前にせまってくる。……同乗者がいた。

当時秋田魁新報で花形として活躍の深

浦宗寿記者だった。その姿は、ちょうどNHKの人気番組「サンダー・バード」の人形のように喜怒哀楽を示さない、悪くいえば顔面蒼白の様子で、ちょこなんとしたものだ。

機は手形原頭上空を一巡してピタリとエンジンを止めた。見物人は「スワ故障か？」とかたずを呑んだが、機は悠々と南隅の草原に着陸し、一同をほっとさせたものだ。知事も連隊長も市長も、皆出迎えた。川反の芸者も全員出動だった。深浦記者は、やっと人心地がついたように記事を言っていたが、あとで「文字通りの空恐しさでいっぱい、生きた空がなかった」と洒落のめしていた。

この郷土訪問に使った飛行機は「アキラ号」と称していたが、かなり旧式なものだった。したがって彼は、新造機に強い執着をもって、後援者たちも彼に「秋田号」を贈る計画を持っていた。

しかし、その新しい飛行機に乗ることなく、大正十年十一月三日午後二時半、彼は墜落事故により無惨な死を遂げたのである。行年二十八。そして「秋田号」は、その前年から建造がはじめられ、半分がたでき上っていた。死後、それは完成し、彼を真の鳥人に育ててくれた陸軍

に献納されて国家の役に立つことになった。地下の霊も、せめてもの慰めとしたことであろう。

佐藤章の死は、指導飛行中に起きた。湯沢市山田出身の武石某という練習生と同乗し、千葉県津田沼上空においてであった。操縦桿の操作の誤りから急に降下をはじめた時、不馴れた練習生は気も動んでんしてしまったのだらう。彼の「手を放なせ！」という命令をきかばこそ、ますます強く握りしめ、すがりつくばかりであった。瞬秒の出来ごとであった。章の「手を放なせ！」という叫びを、地上の関係者たちは聞いていた。機体は真逆さに墜落した。

それも不運が重なった。田畑や砂浜に落ちたのならともかく、京浜線のレールの上に落ち、みるまに機体は炎上した。血も出ないほどに焼けただけだ。残されたのであった。

### 飛行詩人

彼に飛行詩人の名を冠したのは、元東京毎日の社会部長だった小野賢一郎ではなかろうか。章は彼に向って、宙返りをする時の心境を「クルクルと回っている」と地平線が乱れて、目に見える世界が未米派の絵のようになるのだ」と語ったというが、まさに詩人に備うる表現ではないか。

背が小さく、その風貌が似ているとこ

ろから彼にはチャップリンの渾名があった。当節でいえば、色が浅黒く、その精悍さからもアイン・ジョージと呼ばれることと疑いなしである。いずれにしろ、この二人の芸能人が女色の点で一頭抜きんでているように、彼もまたその短い生涯を随分女にはもてたらしい。単に、時代の先端をゆく飛行家としてばかりではなくて、なかなかの男前ではあった。現に現存する老妓の速懐をきいたことがあり、その人は章をうたった当時の替え歌を低く口ずさんでくれた。

遺児に章子があった。大正十三年、彼を追慕する人たちによって秋田市の千秋公園池畔に胸像がつけられた時、このかわいらしい少女の手によって幕が引かれた。戦時中は、まるで父の衣鉢を継ぐかのように飛行機の設計関係の仕事に携っていたが、戦後は郷里にその消息を絶っているという。

この胸像も、のち美術館の前に移され今度はまた秋田空港へ移転の話がでてくるが、かくも進歩した航空界の現状を毎日見あたりに見られるその地が、あるいはふさわしいのかもしれない。

彼の菩提は、祖先とともに、郷里の萩沢部落内の墓所にとむらわれている。法名は 誠忠院釈章諦。

▼筆者―明治二十六年十二月、能代市檜山町に生まる。幼時秋田市に移り、明治四十五年、秋田魁新報記者となり四十年間勤めた。社会部長として活躍、とくに花柳界の記事に腕筆をふるった。